

文 化 財 学 習 会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 津田町の古墳を巡る

講 師 松田 朝由

(大川広域行政組合職員)

平成 2 4 年 1 1 月 2 5 日 (日)

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会

高 松 市 教 育 委 員 会

1 うのべ山古墳

鵜部半島の南に延びた尾根上に造られています。南の平野側に前方部を向けた前方後円墳です。築造された年代は発掘調査によって壺が発見されており、古墳時代

前期初頭、三世紀後半になります。この時期は日本列島において前方後円墳が造られ始める出現期になります。県内では同じ頃の古墳として、高松市鶴尾神社四号墳やさぬき市丸井古墳が挙げられます。

墳丘を見ていくと、たくさんの石が積み上げられているのが分かります。うのべ山古墳は土ではなく、石を積んで墳丘を形成しています。これを積石塚といいます。香川県では高松市石清尾山古墳群や善通寺市野田院古墳など東讃から中讃にかけて見られ、香川県に特徴的な古墳と考えられています。さぬき市ではうのべ山古墳の南に見える火



うのべ山古墳の墳丘

山の南側の内陸部、大川町にある川東古墳が積石塚です。うのべ山古墳から相地峠^{あいちとうげ}を越えた東側の丘陵頂部に川東古墳が見え、内陸ルートで結ばれた二つの古墳の密接な関係が窺えます。

香川県内の積石塚を概観すると、多くに安山岩が使用され、標高百mを越える高所に築造されている傾向があります。うのべ山古墳は標高九mの低い尾根にあり、かつ、鵜部半島では安山岩は採集できません。従って、石材は海岸部に散布している丸みをおびた花崗岩を中心として様々な石材が使用されています。この点が県内の他の積石塚と異なります。このような低い場所に古墳が造られた理由として、海との関わりが考えられます。現在のはうのべ山古墳の周囲は陸地化していますが、古墳時代当時は海水が入り込み島状になっていた可能性があ



発掘調査で明らかとなった積石の様子

り、今も古墳の南には塩出という地名が残っています。外部から船に乗ってやってきた人々からの視覚に入りやすい場所に古墳は造られているのです。

うのべ山古墳は平成十六年から十八年にかけて発掘調査が実施されました。次に発掘調査の成果を紹介します。

墳丘が積石塚であることは紹介しましたが、発掘調査によつて後円部のみ墳丘外側の斜面に石を積んでいたことが明らかになりました。これは、自然地形に石を積むことを外周段築がいしゅうだんちくといい、香川県の古墳では類例がいくつかあります。後円部のみに見られる点がポイントで、前方後円墳全体ではなく、後円部のみを大きく見せていたということになるのです。うのべ山古墳の前方部は幅が細く高さは約五十cmと足で跨げる程低く造られています。これはそもそも前方部が古墳の本体である後円部に行く通路であつた形跡を示します。前方後円墳は新しくなるにつれて前方部



発掘調査時のうのべ山古墳

が高く、そして幅広くなっています。前方部の様子からもうのべ山古墳が出現期の古墳であることが分かります。

次に出土遺物について見ていきます。うのべ山古墳は積石によって墳丘を築く前に、まずは築造予定地の尾根を平坦に整形しています。その時に東側に削った土をならしえており、その土の中から弥生時代の終わり頃から古墳時代の初めにかけての土器が出土しています。古墳が造られる前にこの場所に人が住んでいたのか、或いは古墳築造に際してお祭りが行われ、これらの土器が使用されたのか、いずれにしてもこれらの土器が古墳の築造年代を考える際の上限になります。

一方、古墳にお供えしたと考えられる土器も出土しています。その土器をひろくちつぽ広口壺といえます。上部がラップ状に大きく開く形をしており、同じような土器が香川県内各地の古墳時代前期の古墳から出土しています。

この広口壺は時代によって形が変化しており、形によつ



出土した広口壺

て年代が判定できます。広口壺の形から古墳の築造年代が明確になり、最初に説明したように前方後円墳の出現した最初の古墳であることが判明したのです。

この広口壺から明らかになったことは年代だけではありませんでした。ポイントは、これら広口壺が香川県の前期古墳でよく見られるということです。つまり、うのべ山古墳で香川県各地の前期古墳と同じ広口壺がお供えされているということは、うのべ山古墳が地元香川県の特徴をもった古墳であることを示しています。

うのべ山古墳の特徴をまとめると、第一に出現期の古墳ということ。津田湾沿岸では最初に造られた古墳といえます。そして、第二に古墳の様々な特徴に地元香川県に見る古墳の特徴が見られる点が挙げられます。うのべ山古墳の後、津田湾沿岸には古墳が次々と造られていきますが、うのべ山古墳から後の津田湾沿岸の古墳には地元香川というよりは、当時の畿内政権の中心地であった近畿地方の古墳に見られる特徴が窺えるようになります。つまり、地元的な古墳から畿内的な古墳への変化がうのべ山古墳を通じて読み取ることができます。

2 けぼ山古墳

鵜部半島の北端、海に面した尾根上に造られています。前方部を東に向けた前方後円墳です。全長は五十五mで、津田湾沿岸では岩崎山四号墳とともに最大規模の古墳になります。後円部頂部に縄掛突起なわかけとつきのついた珍しい凝灰岩製の蓋石が見られることで有名でしたが、これまで本格的な調査はほとんど行われてきませんでした。平成二十二年に測量調査と発掘調査が行われましたが、調査前は雑木で古墳の中に入り込めない状態でした。

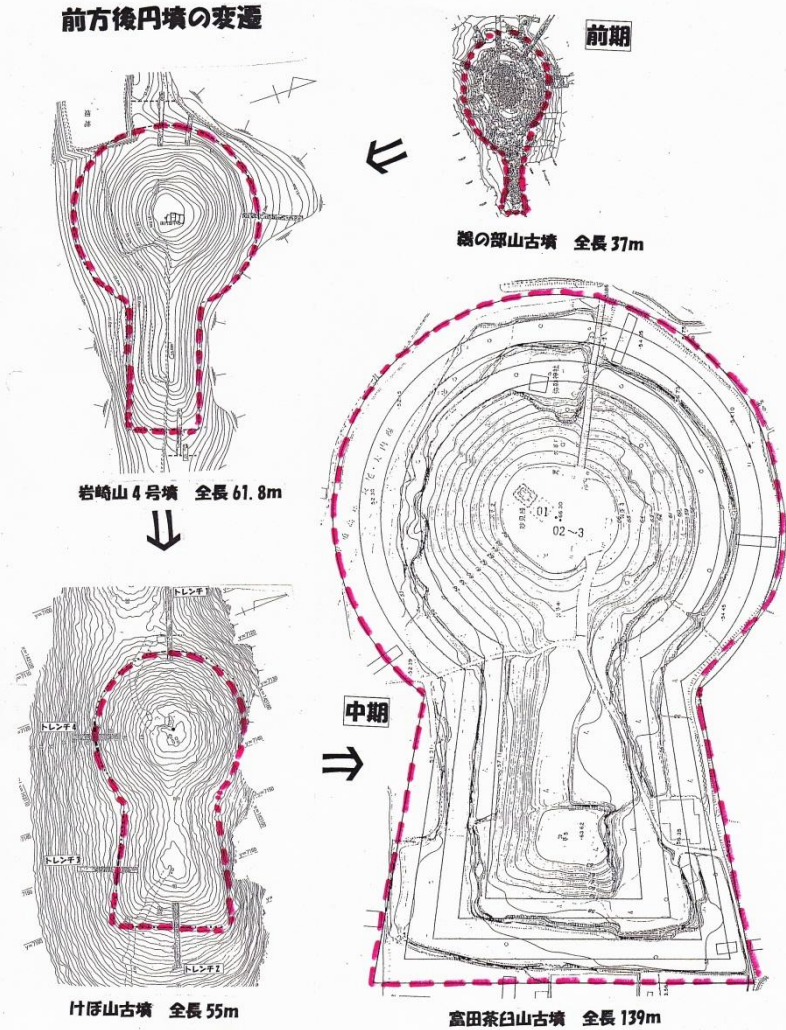
古墳の形に注目してみましょう。前方部は先端に向って直線的に広がっており、先端の幅は後円部幅よりやや狭い程度です。うのべ山古墳の前方部と比べてその発達具合は明瞭です。興味深いのは全体の形か四国最大の前方後円墳、富田茶臼山古墳に似ている点です。築造時期はけぼ山古墳が古墳時代前期後半、富田茶臼山古墳が古墳時代中期初頭でけぼ山古墳が造られてからまもなくして造られたのが富田茶臼山古墳になります。富田茶臼山古墳の造られた大川町には一世代前に相当する前方後円墳は見られず、突如として四国最大の古墳が出現することになります。

一方、津田湾沿岸では古墳時代前期初頭から連綿と約一世紀に渡って規模の大きな古墳が築造されてきました。しかし、けぼ山古墳を最後に築造は停止してしまいます。

つまり、津田湾沿岸で古墳が造られなくなる時期と富田茶臼山古墳が出現するのは連動しているのです。そして、けぼ山古墳の形が富田茶臼山古墳の形に似ているのは重要だといえます。

具体的にみると、富田茶臼山古墳は三段になっていますが、その二段目の形がけぼ山古墳に似ており、かつ、大きさはけぼ山古墳の約二倍になっています。香川県内で

前方後円墳の変遷



けぼ山古墳と築造年代に近い古墳として高松市今岡古墳、三谷石舟古墳がありますが、古墳の形は富田茶臼山古墳、けぼ山古墳とは大きく異なります。けぼ山古墳はまさに香川県内で一番富田茶臼山古墳に形の似ている古墳であり、その背景として津田湾沿岸の首長が大川町に移動した可能性を想定するのも面白いでしょう。

しかし、一方で埴輪に注目すると、両古墳に大きな違いがあることも事実です。富田茶臼山古墳では墳丘に円筒埴輪と朝顔形埴

輪がぐると巡らされていました。こうしたあり方は古墳文化の中心である畿内地域の古墳に共通しています。富田茶臼山古墳は古墳の大きさのみならず、古墳を構成する様々な特徴においても畿内地域との密接な関わりがあつて、地方に築造された畿内型古墳として評価することができます。

一方、けぼ山古墳では円筒埴輪はほとんど出土しませんでした。墳丘に巡らされていたのは壺の形をした壺形埴輪だったので。壺



出土した壺形埴輪

形埴輪を墳丘に巡らすのは畿内地域では極めて珍しいといえます。ちなみにけば山古墳の壺形埴輪は壺の形はしていますが、当時の人々が日常生活で使用する壺とは大きく形が違います。最初から底に孔があけられており、厚手に作られています。一言でいうならばあまりいい形には仕上げられてはいません。最初から実用的な壺として製作されたのではなく、古墳に並べるための非実用的なものとして製作され、かつ、多量に製作して墳丘に巡らすため、一個体ずつにかける労力を最小限に抑えた結果がけば山古墳の壺形埴輪の形になったのだと考えられます。これらは実用の壺ではないことから、壺形土器ではなく、壺形埴輪と呼ばれます。津田湾沿岸で壺形埴輪は一つ山古墳、龍王山古墳で出土しています。古墳は一つ山古墳から龍王山古墳、けば山古墳の順番で造られていきましたが、壺形埴輪は段々と形が崩れていき、日常生活で使用する壺形土器の形から変化していく様子を見ることができます。

最後に刳拔式石棺くりぬきしきせつかんを紹介します。津田湾沿岸では津田町と大川町の境にある火山の中腹で採石される白色をした凝灰岩、いわゆる火山石ひやまいしを使用した刳拔式石棺が首長墓の棺として使用されています。香川県内で刳拔式石棺は他に高松市国分寺町の角関安山岩、鷺ノ山石わしのやまいしを使用した事例が見られます。香川県内は火山石製と鷺ノ山石わしのやまいし製の刳拔式石棺が在地生産されており、少し後の時代になって九州の阿蘇溶結凝灰岩あそようけつぎょうかいがんせい製の刳

拔式石棺が運ばれるようになります。香川県の
刳拔式石棺は断面が竹を割ったような丸い形を
していることから割竹形石棺わりたけがたせっかんとも呼ばれていま
す。新しくなるにつれて丸い石棺から四角い石
棺に変化していき、また装飾的になつていくこ
とが指摘されています。これまでけば山古墳の
刳拔式石棺は聞き取り調査から四角い家形をし
ていたことが指摘されてきました。石棺はかつ
て盗掘によつて存在が知られ、現在は元の状態
に後円部頂部に埋め戻されていると考えられて
きました。ところが、平成二十二年の調査に際
して古墳の掃除をしていると、古墳の裾に安置
されている石仏の横に石棺の一部らしき部材が
石仏に並んで安置されているのが発見されました。石仏の基壇を解体することによつ
て最終的に破壊された破片が三点見つかりました。今、この刳拔式石棺片はさぬき市
歴史民俗資料館に展示しています。基壇を解体した時に、錫製の十銭が出土しました。



発見された刳拔式石棺

この十銭は太平洋戦争末期から戦後まもなくまで使用されていたものでした。石仏の基壇に使用されている石材は後円部頂部のたてあなしきせきしつの竪穴式石室の石室材と考えられることから、この頃に埋葬施設は盗掘され、内部の刳拔式石棺が破壊されてその一部が石仏とともに安置されたことが明らかになりました。

注目したいのは刳拔式石棺の形です。従来云われていたような家形ではなく、断面が円形の、これまで古い段階のものと評価されていた形態だったのです。このけぼ山古墳の刳拔式石棺の発見によって火山石製刳拔式石棺の多様性が判明し、鷲ノ山石製の石棺の変化とは異なることが明らかとなりました。火山石石棺群工人集団と鷲ノ山石石棺集団は異なる石棺集団であった可能性が強くなってきたのです。



後円部頂部にある火山石製蓋石

さて、けぼ山古墳では火山石は刳拔式石棺のみではなく、刳拔式石棺を納めた後に
竪穴式石室を閉塞した蓋石にも使用されています。火山石製の蓋石は岩崎山四号墳に
も見られ、また、伝承からは赤山古墳も使用されている可能性があります。このよう
に津田湾沿岸の古墳では刳拔式石棺のみならず蓋石の製作も火山石によって製作され
たことが窺えます。この点も驚ノ山石製には見られない特徴です。このようなけぼ山
古墳の蓋石ですが、一方で岩崎山四号墳の蓋石と異なる点もあります。それは、蓋石
に縄掛突起がついている点です。縄掛突起のついた蓋石は奈良県屋敷山古墳などに類
例があり、奈良県佐紀盾列古墳群で日葉酢媛陵ひばすひめりょうとされている佐紀陵山古墳さきみづやまこふんも同様の形
態であるとの指摘があります。さらに岡山県備前市鶴山丸山古墳も指摘されています
が、この古墳に納められている刳拔式石棺は火山石製と云われています。

こうしたことから、佐紀陵山古墳も内部に納められている刳拔式石棺は火山石製で
はないかという意見があります。残念なことに佐紀陵山古墳の石棺は現在嚴重に内部
に密閉され、宮内庁が陵墓として管理しているため見ることはできず、火山石製かど
うか確認することはできません。畿内政権の中核であった大規模墳に火山石製が使用
されているとすれば非常に興味深いものがありますが、謎を残しておくのも古代のロ
マンといえるかもしれません。

3 一つ山古墳

けぼ山古墳の東側の小さな山の頂上にあります。南・東・北は海に面しており、古墳から見る海上の景色はとても風光明媚です。東から船でやってくると津田湾沿岸で最初に目にするのが一つ山古墳で、海上からはとても目立つ場所に築造されています。まさに海を意識した古墳といえるでしょう。

一つ山古墳はこれまで津田町史にも紹介されていましたが、記載内容はあまり多くなく、あまり注目されることのない古墳でした。ところが、平成十六年に台風による大雨で海側の崖崩れが発生し、古墳の一部が崩壊するという事態が生じました。そこで崩落する危険のある場所の発掘調査を実施したところ、墳丘頂部から刳拔式石棺が発見されたのです。

香川県では刳拔式石棺は古墳時代前期中頃から出現し、古墳時代中期にはほぼ製作されなくなります。地元での生産が衰退する頃に他地域産の九州阿蘇溶結凝灰岩製が運ばれてくるようになるのです。それが高松市長崎鼻古墳の刳拔式石棺です。また、刳拔式石棺はどの古墳にも納められているものではありません。数多くある古墳の中でも権力を持った首長墓によく見られます。香川県ではこれまで古墳からは前方後円墳のみで発見されていました。こうした中、円墳である一つ山古墳から刳拔式石棺が

発見されたのです。このことは、刳拔式石棺をランクの下がる首長も使用していたということではありません。なぜなら一つ山古墳は円墳ですが、墳径は二十七mもあり、六十m級の前方後円墳の後円部径に相当するからです。

つまり、津田湾沿岸では前方後円墳だけではなく、円墳も首長の墓として採用されたことが指摘できるのです。刳拔式石棺は現在、埋め戻されているため見ることはできませんが、発掘調査の時に形の特徴は記録しています。それによると赤山古墳の刳拔式石棺の一

基によく似ているが、やや新しい特徴が見られることが分かりました。つまり、赤山古墳が築造された後に一つ山古墳が築造されたことが明らかとなったのです。津田湾沿岸の古墳は最初にうのべ山古墳が築造された後に赤山古墳が築造され、続いて一つ



発見された刳拔式石棺

山古墳、けぼ山古墳と築造されました。時代でいうと古墳時代前期中頃になります。

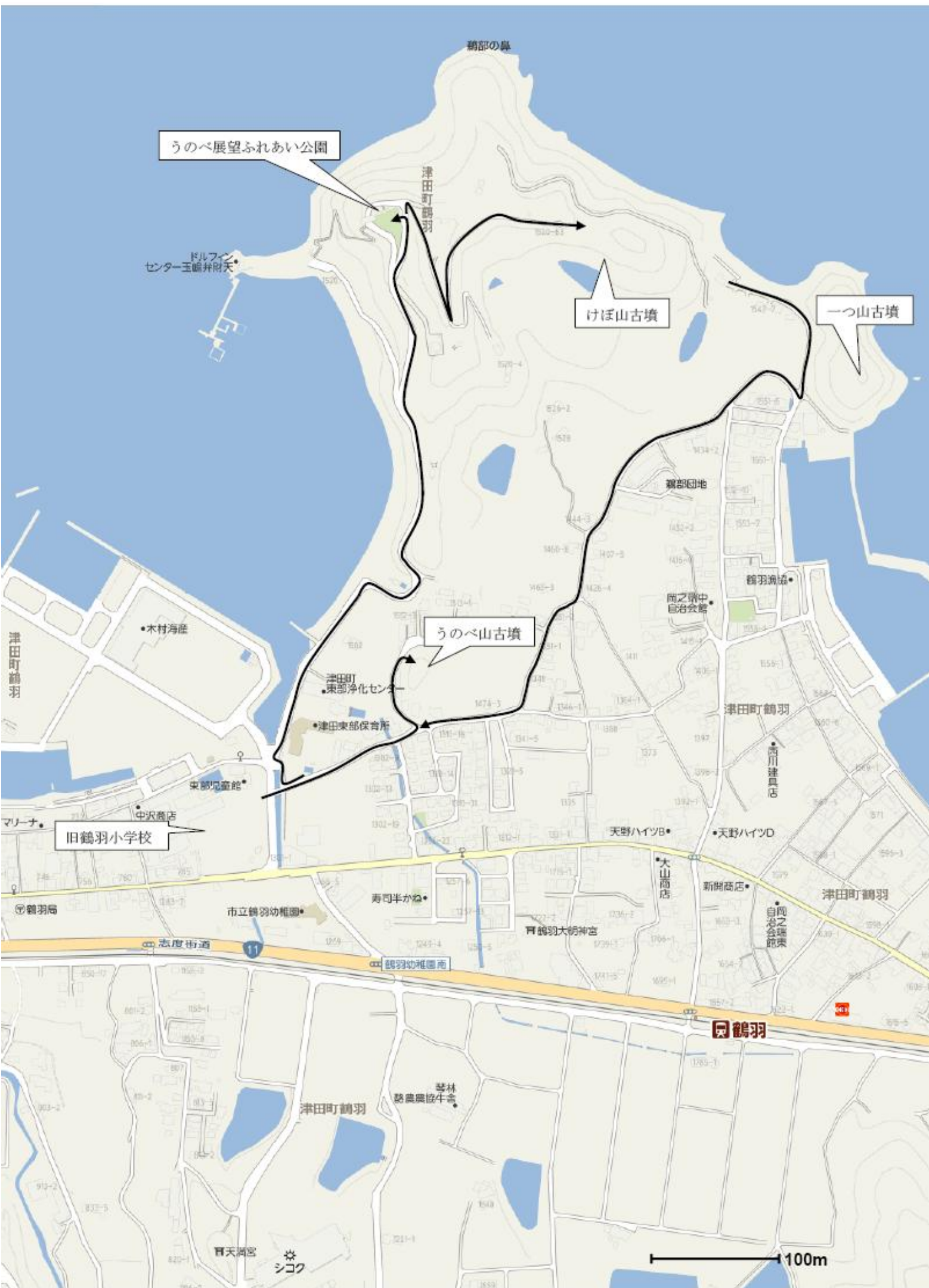
墳丘の斜面を発掘するとたくさん壺形埴輪が出土しました。一つ山古墳は壺形埴輪をぐるりと巡らしていたことが判明したのです。これは後のけぼ山古墳と共通する特徴です。壺形埴輪の形を見ると、日常生活で使用していた壺形土器に比べて作りに粗雑化が見られます。しかし、けぼ山古墳の壺形埴輪ほどは粗雑化してはいません。また、壺形埴輪の外面にはほとんどに赤色顔料が塗られていました。埴輪に赤色顔料を塗るのは津田湾沿岸の古墳でよく見られ、最初のうのべ山古墳では見られませんが、赤山古墳、一つ山古墳、岩崎山四号墳ではほとんどの埴輪に塗られています。続く龍王山古墳になると円筒埴輪には見られず壺形埴輪のみに見られるようになります。けぼ山古墳になるとごく一部に見られるようになります。このように赤山古墳の頃に赤色顔料を塗るようになり、時代が新しくなるにつれて赤色顔料を塗った埴輪の割合が少なくなっていく傾向が窺えます。ちなみに富田茶白山古墳は大多数の埴輪には塗られていませんが、極一部塗られた事例があります。

まとめ 津田湾沿岸の古墳

今回、鶴羽の三つの古墳を紹介しました。平成十六年からさぬき市教育委員会では津田湾沿岸の古墳の発掘調査を実施してまいりました。今回紹介した鶴羽地区とともに西の津田地区の古墳についても少なからず新発見がありました。津田湾沿岸の古墳は従来海との関わりをもつ首長の墓として捉えられ、また、古墳の特徴から、香川県の中でいち早く畿内的な特徴を生んだ特異な地域であり、その背景には畿内政権の地方支配の拠点であったとする見方がなされてきました。そして、地方支配の完成形として富田茶臼山古墳の出現が想定されてきました。このような歴史的経過の中で最初に津田湾沿岸で出現したうのべ山古墳は地元香川の特徴を多く備えていました。次の赤山古墳、一つ山古墳は埋葬施設の方角等に畿内地域の古墳との共通が窺えるようになります、さらに岩崎山四号墳は多くの点で畿内的性格が色濃く見られるようになります。

今年、畿内政権の中枢、古市古墳群の津堂城山古墳から出土した鏡と岩崎山四号墳の鏡が同型であることが明らかとなりましたが、それは畿内政権との交流を窺う重要な証拠といえます。岩崎山四号墳に続いて古墳時代前期後半、四世紀後半に築造されたのが龍王山古墳、けぼ山古墳でした。そして、古墳時代中期に入った五世紀前半に大川町に富田茶臼山古墳が出現し、津田湾沿岸の古墳が姿を消すようになるのです。

古墳時代中期以降の津田湾沿岸には古墳時代後期の小規模な古墳である宮奥古墳がころうじて一基知られるのみで、この地に再び大規模古墳が築造されることはありませんでした。古墳時代中期以降、さぬき市内の古墳築造は内陸を中心としたものに大きく変化したのです。



11月25日（日） 津田町からの復路

JR高徳線

（鶴羽駅）

（高松駅）

12:29 発 → 13:25 着

13:47 発 → 14:41 着

次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 遍路道（屋島登山道）を歩く

とき 平成24年12月16日（日）

9:30～12:00



集合場所 大宮八幡宮（琴電屋島駅から 500m）

講師 山元 敏裕（市教委文化財専門員）

☆広報「たかまつ」12月1日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課（TEL 839－2660「午前7時30分～開始時間まで」）でお知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★次回の交通案内★

ことでん電車【志度線・下り】

（瓦町駅）

（琴電屋島駅）

8:46 → 9:01

9:06 → 9:21



「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を
一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけ
ましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。